

授業科目(ナンバリング)	ソーシャルワーク実習(社会) I (DC206) (実践的教育科目)			担当教員	柳 智盛・韓 榮芝・野田 健・裴 孝承		
展開方法	実習	単位数	2単位	開講年次・時期	2年・集中	必修・選択	選択
授業のねらい							アクティブ・ラーニングの類型
<p>この科目では、ディプロマポリシーに照らし、周りの人々を巻き込んで、協力して課題解決に向けた方策を立案し、着実に実行できるようになることをねらいとする。</p> <p>「ソーシャルワーク実習Ⅰ」は、社会福祉士を目指す者が8～10月の間の8日間、社会福祉の「現場」に実際に身を置く実践的学修である。具体的には、下記をねらいとする。</p> <p>① <u>社会福祉専門職に求められるコミュニケーション能力や人間関係を構築する技術など、実践に必要とされる基礎的能力を体得する。</u></p> <p>② <u>ソーシャルワークの実践に必要な各科目の知識と技術を統合し、社会福祉士としての価値と倫理に基づく支援を行うための実践能力を養う。</u></p> <p>③ <u>支援を必要とする人や地域の状況を理解し、その生活上の課題(ニーズ)について把握する。</u></p> <p>④ <u>生活上の課題(ニーズ)に対応するため、支援を必要とする人の内的資源やフォーマル・インフォーマルな社会資源を活用した支援計画の作成、実施及びその評価を行う。</u></p> <p>⑤ <u>施設・機関等が地域社会の中で果たす役割を実践的に理解する。</u></p> <p>⑥ <u>総合的かつ包括的な支援における多職種・多機関、地域住民等との連携のあり方及びその具体的な内容を実践的に理解する。</u></p> <p>⑦ 社会福祉専門職を目指す者としての自己覚知を深め、「ソーシャルワーク実習Ⅱ」に向けた自己の学習課題を明確化する。</p> <p>さらに、これらを専門的援助技術として概念化し体系立てられるような能力の涵養を目指す。そうした体験を通じて、人をかけがえのない存在として捉え、ホスピタリティの精神に基づいて多様な立場の人々と相互理解を図り、生活課題を抱える人々を支援し、地域社会の課題に対応する能力を身に付け、様々な問題解決のための思考力・判断力の向上を図ることを目指す。</p>							⑦、⑫
ホスピタリティを構成する能力	学生の授業における到達目標				評価手段・方法	評価比率	
専門力							
情報収集、分析力							
コミュニケーション力	(1) 実習先で出会う利用者・職員・関係者等と基本的な人間関係を構築することができる。 (2) 実習生としてふさわしい態度で実習に取り組むことができる。				実習先の評価 実習先の評価	15% 15%	
協働・課題解決力	(1) 相談援助実習Ⅱに向けて自己覚知を深め、自身の学習課題を明確化することができる。 (2) 組織の一員として行動しようとする姿勢を身につけている。				実習先の評価 実習先の評価	20% 20%	
多様性理解力	利用者の幸せを願い、利用者の生活に寄り添うことができる。				実習先の評価	30%	
出席					受験要件		
合計					100%		
評価基準及び評価手段・方法の補足説明							
長崎国際大学「相談援助実習 評価表」に則り実習先の施設・機関が評価を行い、原則的にはそれに基づいて担当教員が評価を行う。日々の活動や実習ノートを通して適宜スーパービジョンが行われ、フィードバックとなる。							
授業の概要							
厚生労働省通知により指定された方法に基づき、配属施設・機関の定めた実習プログラムにそって実習を行う。 実習ではおおよそ次のような点を学ぶこととなる。							
1. 利用者やその関係者(家族・親族、友人等)、施設・事業者・機関・団体、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや円滑な人間関係の形成							

2. 利用者やその関係者（家族・親族、友人等）との援助関係の形成
3. 利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題（ニーズ）の把握、支援計画の作成と実施及び評価
4. 利用者やその関係者（家族・親族、友人等）への権利擁護活動とその評価
5. 多職種連携及びチームアプローチの実践的理解
6. 当該実習先が地域社会の中で果たす役割の理解及び具体的な地域への働きかけ
7. 地域における分野横断的・業種横断的な関係形成と社会資源の活用・調整・開発に関する理解
8. 施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際（チームマネジメントや人材管理の理解を含む。）
9. 社会福祉士としての職業倫理と組織の一員としての役割と責任の理解
10. ソーシャルワーク実践に求められる、アウトリーチ、ネットワーキング、コーディネーション、ネゴシエーション、ファシリテーション、プレゼンテーション、ソーシャルアクションの実践的理解
11. 福祉専門職としてのあるべき姿と必要な能力を実際に学び、自己を客観視し、自らの課題を明確にし、視野を深めること。

実習後は、事後学習に努めること。ソーシャルワーク実習指導Ⅰでの事後学習（実習報告会での報告、実習報告書の作成）はもちろんのこと、実習中に明確になった自己の課題についても克服するよう努めること。

注意点

- ① この「ソーシャルワーク実習Ⅰ」を履修するには、本学独自の「実習履修要件」が課せられている。詳しくは『履修の手引き』に記されているが、履修にあたってはその要件をクリアしているか否かを必ず確認すること。
- ② 「ソーシャルワーク実習Ⅰ」のみの履修はできない。「ソーシャルワーク実習の理解」及び「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」も併せて履修すること。
- ③ 実習期間中に遅刻や無断欠勤があったり、「実習ノート（日誌）」の提出がなされない場合は、実習の中断や中止もあり得るので注意をすること。

教科書・参考書

教科書・指定図書：社団法人日本社会福祉士養成校協会監修、長谷川匡俊・上野谷加代子他編（2014）『社会福祉士相談援助実習（第2版）』中央法規。（2年次開講科目である「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」と共通）

参考書：特に指定しない

授業外における学修及び学生に期待すること

ソーシャルワーク実習は、見学ではなく「配属実習」である。現場に一定期間身をおき、その中で指導を受けながら福祉実践について学んでいく。実習の場面では、大学で学んだことを踏まえてそれらを主体的・実践的に統合したり、専門的な援助関係の中で人間理解・社会理解・自己理解を深めながら、社会福祉について総合的に学んでいく。自身が将来社会福祉専門職（社会福祉士）になるにふさわしいか否かを考えさせられる場でもある。

実習体験が実りあるものとなるかどうかを決めるのは、実習生個人個人の態度と取り組みである。事前学習、事後の学習をしっかりと行うことが望まれる。各自の研鑽に期待する。

回	テーマ	授業の内容	予習・復習
1～25	①職場実習（概ね1週目）	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者やその関係者(家族・親族、友人等)、施設・事業者・機関・団体、住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや円滑な人間関係の形成 ・職場のミッションや援助方針の理解 ・施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの運営管理の実際(チームマネジメントや人材管理の理解を含む。) ・全職種の役割とそれらからの「利用者理解」の把握と専門職同士の相互理解 ・多職種連携及びチームアプローチの実践的理解 ・カンファレンスへの参加 ・当該実習先が地域社会の中で果たす役割の理解及び具体的な地域社会への働きかけ 等 	<p>実習ノート(日誌)に記録を付ける。その他は実習先の指示に従うこと。</p>
26～40	②職種実習（概ね2週目）	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者やその関係者(家族・親族、友人等)との援助関係の形成 ・社会福祉士としての職業倫理と組織の一員としての役割と責任の理解 ・利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題(ニーズ)の把握、支援計画の作成と実施及び評価 ・社会福祉士の担当する業務全般(書類管理、電話対応、見学受入れ・説明、各種事務等) ・社会福祉士の業務への同席、同行、説明 ・タイム・スタディ 等 	<p>実習ノート(日誌)に記録を付ける。その他は実習先の指示に従うこと。</p>

上記のスケジュールはおおよその指針である。